

2019. 10. 04

畑 啓之

地域活性化という言葉は死語となりつつあるのか それとも定着したのか

ここに示すリストは、私の生まれ故郷である兵庫県加古川市上荘町国包での活動の記録であり、国包けやきの会が主に主導したものである。町おこし・村おこしと聞くと往々にして構えてしまうが、「皆が楽しく」との共通認識があるので、活動が続いてきているものと思う。秋祭りの感覚と相通じるところがあるのかもしれない。

一方、町おこし等の地域創生は、国の掛け声もあり2016年にはそれなりに盛り上がったが、いまはその熱気が感じられない。この国包けやきの会の活動は同じペースで地道に続けられてきているが、2016年だけはその露出度が高いことがわかる。

以下には、2016年に書いたブログも引用したので、現在と2016年当時を比較してもらいたい。

国包けやきの会 活動一覧

http://www.alchemist.jp/kunikanenouhou/kunikane_gaiyou.html

2019年

国包 盆踊りと未来へつなぐあかりの祭典が実施されました（8月13日）

国包けやきの会新春セミナー

2月17日（日） 播州歌舞伎クラブの寿式三番叟公演と講演

3月17日（日） 植田一氏「よろず生涯学習、合言葉はグローバル」

TAKA & アーリー殿下 歌と笑いのオンステージ

2018年

第4回国包伝統文化祭（9月15日、16日）風景を掲載

国包けやきの会新春セミナー

2月25日（日） 飯沼博一氏「国包と八幡町の歴史に学ぶ」

モアナニ・ハワイアンズによるギター・ウクレレ演奏

3月18日（日） 京山幸太師浪曲「孝子万兵衛」

2017年

衆院選 町の実情国に伝えて（国包けやきの会、神戸新聞10月6日）

国包けやきの会新春セミナーのご案内 国包公会堂 入場無料（1月24日）

2月12日(日) 岩坂純一郎氏「加古川と国包の歴史に学ぶ
バイオリン演奏 粉河優子氏

3月12日(日) 旭堂南海師
「おもしろ国包講談・加古川の舟運と鉄道ものがたり」

2016年

第2回国包伝統文化祭(国包けやきの会、9月3日、4日)情報を掲載

国包けやきの会会長 藤原忠悟 伝統守り地域を元気に

会の合言葉は「今できることを面白く」(神戸新聞4月10日)

「国包まちづくり」紹介(2月26日、地方創生ワークショップ)

国包けやきの会新春セミナー 谷五郎氏講演(2月14日)

加古川の伝統工芸再興・地方創生の現場から(2月9日、神戸新聞)

国包けやきの会新春セミナー

2月14日(日) 谷五郎氏「谷五郎の田舎暮らし、今こそ地方の時代」

2015年

第1回国包伝統文化祭(国包けやきの会、9月5日、6日)情報を掲載

2016年05月25日のブログより

東京から見た地方 住人から見た地域 これを活性化するのに先人「河合寸翁」の知恵は役立つか

https://alchemist-jp.at.webry.info/201605/article_21.html

一昨日(5月23日)日本経済新聞夕刊の一面、「明日への話題・地方創生を考える」の冒頭部分である。

「日本経済の真の復活の為には地方創生が待ったなしと言われる。同感である。しかし、現状の取り組みはまだまだ迫力不足ではないだろうか。既存の枠組みから外れた大胆な発想に基づく、大掛かりな仕掛けやプロジェクトを掘り起こす必要がある。(つづく)」

昨年は地方創生の議論で地方が盛り上がった。地方創生か地域創生かという非常にベーシックな議論から始まり、各市町村は地域活性化のためのアンケートを住民に求めたりもした。地方は東京から見た位置づけであり、地域は住民からの視点である。また、アンケートは東京主導で進められた全国的な流れである。アンケートのためのアンケート。一応の結果集計はなされたが、それが市民生活に活かされることはなかったと認識している。予算獲得のためのお祭り騒ぎの終わりである。

今年に入ってからは、ニュースなどで地方創生と報じられることはあっても、身近で地方創生という言葉聞く機会はめっきり少なくなった。私も含めて、地方に住んでいる住民が本当に地方創生を望んでいるのか、ということが重要だ。住人の多くが必要だと強く願ってれば、そのことはアンケート結果に表れるはずであるが、アンケートの設問次第で得られる答えは大きく振れる。

私の住んでいる兵庫県加古川市には南北問題があると私は思っている。面積で市面積の半分を占める南部は工業地帯、商業地区、そしてベッドタウンであり市人口の9割が居住する。一方、残りの半分の面積を占める北部は田園地帯であり、過疎地であり、市人口の1割が居住する。交通の便も決していいとは言えない。この環境の違う南と北に同じ設問のアンケートを採って得られてくる答えは、当然ながら市南部の意見を色濃く反映するものである。

東京からみて地方創生とは、地方（地域）の特徴を活かして地方を活性化することと理解している。ここで問題となるのが、東京の考える地方の単位である。当然のことながら東京は地方を市町村単位で考えている。したがって、アンケートも市町村単位となる。だが、一つの市町村内部にも、東京と地方に匹敵するほどの環境のバラツキがある。たとえば先ほどの加古川市の南北問題だ。

住民の要望を聞き取る一番確実な方法は、住民にフェイス・トゥ・フェイスで聞き取り調査することであるが、そんなことは行われた形跡がない。聞き取りをするとあまりにも多くの要望事項が噴出し、收拾がつかなくなることがその理由のひとつと私は考えている。市議会だけでも答弁に四苦八苦しているのに、その上、多くの要望を抱え込んでしまっただけでは、行政運営に支障が出るとの考えだろう。

地方は東京からの補助金のみをあてにするわけにはいかない。地域経済をどうするのか。そのために地方の特徴をどう活かすのか。この議論が真剣になされなければ、地方創生には成功しないだろう。地方を知り尽くしたリーダーのもと、地方創生チームを立ち上げ、理詰め議論をすることが重要である。

江戸時代に地域活性化を成功させた河合寸翁は、地域の特性を把握し、非常に粘り強く人々を説得し、リーダーを育て、地域活性化に成功した。リーダーシップのある人間が、人生をかけた大きな志をもって一つのことにあたる。グローバル化の今の時代、河合寸翁が成し得たこのようなことが、地域という限られた空間において可能なのだろうか。まず、その可能性から考え、篩に残った可能性のあることから取り組む、その篩を振るリーダーがまずは求められる。

国包けやきの会は良いリーダーを得たといえるのではないだろうか。